

## ■日本燃焼学会創立50周年記念特集■

## 日本燃焼学会創立 50 周年を迎えて

日本燃焼学会 会長 角田 敏一

日本燃焼学会は、1955年に日本燃焼研究会として創立され、ほぼ同時に燃焼分野の国際的組織である国際燃焼学会(The Combustion Institute)の日本支部となりました。その後、1991年に日本燃焼学会と改称され、このたび50周年を迎えることになりました。本会は、「国際燃焼学会と緊密な関係を保ちながら、燃焼に関する学術研究の振興ならびにその成果の普及を図る」との趣旨で創立され、国内はもとより国際的に幅広く活発な研究活動を行うことにより、燃焼分野の学術振興ならびに技術革新に多大な貢献をしてきました。

正会員25名および維持会員18団体で創立された本会は、その黎明期に矢木栄初代会長をはじめ諸先輩のご指導により、盤石の礎が構築されました。その後、我が国産業の著しい興隆および学術研究の躍進に伴い発展の一途をたどり、正会員720名余および維持会員64団体を擁する学会に成長しました。このところ、新規加入の維持および正会員が急増する兆しがみうけられ、本会のさらなる発展が予感されます。

本会所属の碩学により、これまでに世界最高水準の独創的で卓越した多くの学術研究が行われてきました。これらの研究成果は、国際的にきわめて高く評価され、国際燃焼学会から幾度となく顕彰されてきました。世界の燃焼研究者が一堂に会し最新の研究成果について議論する国際燃焼シンポジウムを二度にわたり主催しました。第15回(1974年、東京都)および第29回(2002年、札幌市)国際燃焼シンポジウムは、関係各位のご尽力により盛大に開催され、会議運営ならびに講演内容について世界各国の参加者から絶賛の声が寄せられました。これまでの貢献により、本会の国際的地位は着実に向上し、国際燃焼学会副会長・理事などの要職を担い、世界の燃焼学分野において指導的役割を果たしてきました。また、アジア太平洋国際燃焼会議(ASPACC)、ならびにアメリカ、ロシアあるいはオーストラリア燃焼学会と本会との合同燃焼シンポジウムを開催するなど、近隣諸国とはとくに親密な活動を積極的に展開してきました。

1963年、12編の論文とともに日本化学会講堂で産声を上げた燃焼シンポジウムは、その後着実な発展を遂げ、参

加者550名余、論文数250編余を数えるまでに成長しました。新しい最先端の学術的知見の講演発表に対し真摯で活発な質疑討論が繰り広げられ、多くの参加者で埋め尽くされた講演会場は熱気に溢れています。燃焼シンポジウムは、燃焼科学および技術分野における貴重な情報の発信源として重要な役割を果たし、社会から高く評価されてきました。

学会誌「燃焼研究」は、1959年に創刊され、2002年に「日本燃焼学会誌」へと改称され、現在に至っています。年4回発行される美しい装丁の学会誌には、原著論文ならびに総説記事が掲載され、好評を博してきました。本会は、これまでに燃焼科学・技術分野における永年にわたる貢献、優れた研究および技術に対し、功労賞、論文賞ならびに技術賞を贈呈し、その栄誉を讃えてきました。また、将来を担う新進気鋭の研究者育成を目的として、奨励賞を贈呈するとともに、国際会議参加費用の援助を行ってきました。近年、燃焼に関わる学術研究の最先端を明らかにするとともに将来の技術動向を探る目的で、「先進的燃焼技術の調査研究」委員会を発足させました。活動は順調に進捗し、最新の情報と解説を満載した報告書が参加企業・団体に配布され、高い評価を得ています。本会は、現在任意団体であり、これまでに会員から法人化への強いご要望が出されていきました。このたび、新公益法人法が施行されるのを機に、会計年度、役員任期、総会開催時期、シンポジウム開催時期の再検討を含む法人化への準備作業に本格的に取り組み始めました。

研究の創造性が研究者個人に帰属することはもちろんですが、優れた科学・産業技術の構築には、これに加えて研究者間の連携ならびに知識集約が必要不可欠です。本会の重要な使命は、個人の創造性を育むとともにその研究成果が大きな社会的波及効果を生むための場を提供することにあると考えます。創立50周年を迎えるにあたり、諸先輩が構築された伝統に安住することなく、新しい時代に向けた変革を行い、さらなる充実・発展をめざして邁進する覚悟でございます。

これまでご厚情を賜りました関係各位に対しましてあらためて衷心より感謝申し上げますとともに、一層のご鞭撻・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。